

「ミシストリマ」より 一訳とノートー

ヨルゴス・セフェリス 作

中井 久夫 訳

食欲がでるとしたら土と石くらいだ。

アルテユール・ランポー「地獄の季節——空腹——」

(篠沢英夫訳)

鋤の刃や船の竜骨にも入り交じる
あめつち はじめ
天地の肇の種子をも探した、
ドラマ
太昔の劇をまた始められないかと思つて。

私たちは家に戻つた、うちのめされ、
脚はなえ、くちびるはひびわれて
錆と塩水との味がしみた。

眼を覚ました時、私たちは北に向かつて旅立つた、

客人となつて、

私たちが傷つけた白鳥たちの

真白な羽に乗つて霧の中に入つて行つた。

冬の夜は東からの強い風が私たちを狂わせ、

夏はなかなか沈まない昼の末期のあえぎの中で

私たちは自分の居場所がわからなくなった。

私たちが持ちかへつたのは

こんな素人ほい腕前の浮き彫りのいくつかだけだった。

天使よ——、

三年、私たちは天使を待った、ひたむきに、

松と砂浜と星とに

眼をこらして。

洞窟の中にまた井戸の洞穴が。

私たちには易しいことだった、偶像や飾りの品を

まだ私たちの側にいてくれた友たちを喜ばすのは。

引き揚げて

綱が切れた。井戸囲いの縁に

綱が作つたすり減つた溝だけが

私たちのむかしのしあわせを忍ばせるよすがだ――

かつて「がけつぷちに指をかけて」と

詩人ソロモスが言つたように。

指は初め石の冷えを少し感じるにしても、

やがて身体の熱気のほうが優勢となり、

洞窟はおのが魂を賭けて勝負に出るが、

そのつど魂を失うばかり。

完全な沈黙、水しずくの音一つなくて。

忘れたもうな、あなたが討たれた湯船の恨みを*

眼を覚ました。手がこの大理石の頭を握っていた。

そのせいで私の肘はしびれているが、さてどこに頭を

下ろしたらいいか、わからない。

私が夢から抜け出ると入れ代りに、この頭は夢の中に落ち

て行つて

私と頭とが一ついのちになつたのだった。

さてもう二度と引き離せるか、それはできる相談か。

私はその眼を見る、開いても閉じてもない眼を。

私はその口に話しかける、

いつも話そうとする寸前の口に。

私はその頬を手で支える、

皮膚につらぬき穴があいた頬を。

私は力をつかききった。

私の両手がちぎれた。手はちぎれたまま私のほうに

じりじりとにじり寄ってくる。

*アイスキュロス「コエーポロイ」四九一行 久保正彰訳。オレステスが父アガメムノンの墓に語りかけ、父がクリュタイムネストラに切り殺された浴室を思出す。

四

アルゴナウトの人々

して、魂よ、きみが
おのれを知るべきならば
魂は魂の中を覗くほかはない。
異邦人や敵人ならば鏡の中にすでに見たではないか。

あいつらはいいい奴だった、仲間は。

疲れても、渴いても、凍えても、

文句一つ言わなかった。

樹々と波とが風と雨とを受け入れ
暗夜と太陽とを受け入れ
変化のただ中であつて変わらぬ
そんなありような仲間だった。
あいつらはいいい奴だった、ひねもす
權を漕いで汗を流した、眼を伏せて
規則ただしく息をした。
動きにすなおに従う皮膚を血がほてらせ赤くした。
犬たちが吠える岬を越えて
バーバリ・イチジクの生える無人の島を
西に向かつて行つた時など
彼らは眼を伏せて歌っていた。
あいつらは言つてた、もし自分のことを知りたければ
魂の中を覗くほかはない、と言つてた。
そして權が日没には
黄金の波を打った。
私たちは多くの岬を過ぎ、多くの島を過ぎ
一つの海を過ぎては次の海に、

次のカモメとアザラシとに入った。

死んだ子を悼んですすり泣く

ふしあわせな女たちにも会った。

アレクサンダー大王とアジアの深い懐に埋もれた栄光を
必死に探す連中にも会った。

夜のかおりに満ち、鳥の歌に包まれた岸に
もやい綱をつないだこともあった。おおきなしあわせの

手にして去った水域だった。

しかし、この旅に終わりはなかった。

彼らの魂は權や權受けと一つになった。

舳先のいかめしい船首像や

舵の後ろの航跡と一つになり、

その形を砕く水と一つになった。

仲間は一入また一人、眼を伏せたまま

死んで行った。彼らの權が

彼らの眠る岸辺の目印となった。

彼らを思い出す者はいない。正義の神よ、衡平を。

五

私たちはあの人たちを知らない。

深い底で語ったのは希望だった、

私たちは子どもの時からあの人たちを知っていたと。

二度は目にしたことがあるうか。

その後 あの人たちは船に乗った。

石炭を積み、穀物を積み、そして私たちの友は

おれだつみ 大洋の彼方に去って

永久に帰ってこない。

私たちは、明け方には、くたびれたランプのそばで

紙に人魚や海の貝殻を落書きし、

夕方には川辺に下りて行って

この先をずっと辿ると海に行けるのだと思い、

そして夜ごとタールの匂う地下室で過ごす。

友だちは私たちから去った。

そもそも会ったことがなかったかも、あるいは

眠っているあいだに会っただけかも。

眠りは波の息づかいの聞こえるそばまで

私たちを連れてきてくれた。

私たちはきつとあの人たちを探し求めているのだ、

もう一つ別の生き方を

探し求めているのだから、

彫像たちをとおしてその向こう側に。

六

モーリス・ラヴェル

噴水がいくつもある庭は雨の中だから

低い窓から磨りガラス越しに

見るほかはないだろうね。きみの部屋は

暖炉の炎のほのかな明かりだけで

ときおり遠い稲妻が

きみの額の皺をくつきり照らし出すだろうね、

旧友よ。

噴水のある庭は、きみの手の中にあつた時には

もう一つの生命が脈を打つ世界だった、

壊れた彫像と悲劇的な円柱との向こうの世界、

そして新しい石切場のそばの

キョウチクトウの木立の中で踊っていたあの噴水

——ああいったものは

いずれ磨りガラスできみの時間から

切り離されてしまうだろうね。

きみはほっと一息つけなくなるだろう。

きみの記憶から泥土と樹液とがほとばしり出て

この窓を打つだろう、

外の世界からの雨に打たれているこの窓を。

海は西のほうで山並みに溶けて一つになる。

左手から南風が吹いてきて私たちを狂わせる、骨から肉をはぎとる風だ。

松とイナゴマメに囲まれた私たちの家。

大きい窓。大きな卓子。

きみに手紙を書くための卓子だ、私たちは手紙を

書き合つて

もう何月にもなるね、私たちが離れて生きている、

その隙間を埋めようとして

その間に手紙を落としてきたよね。

きみは暁の明星だった、きみが目を伏せる時は、

私たちの時間は傷口を覆うオリーブ油よりもやさしく

口蓋に滲みとおる冷たい水よりも快く、

白鳥の羽よりも和やかだった。

きみは私たちの生命をきみの掌の中に握っていた。

亡命の苦いパンを味わった今、

真夜中、私たちが白壁の前に立ちどまるとき、

きみの声は私たちに迫ってくる、

焔のような希望として。

だが、またしてもこの空気が剃刀の刃を研ぐ、

私たちの神経をあたっている剃刀の刃を。

私たちのそれぞれがきみに同じことを手紙に書き、

おのおの相手のいる前では黙ってしまい、

それぞれが同じ世界を別々にみつめている、

山並みの上の光と暗闇そしてきみとを。

私たちの心からこの悲しみを

取り払ってくれる者はいないだろうか？

昨日の夕方は烈しい雨であった。また今日は

雲に覆われた空が重くのしかかる。私たちの思いは

昨日の驟雨の松葉の針のように

私たちの戸口の前に束ねて置かれ、何の役にもたたぬが、あるいは建てるそばから崩れる塔にでもなるのだろうか。

この岬の上の、過疎の村々の間にあつて
南風にくまなく洗われ

私たちの前に立ちはだかる山並みできみを隠す——が
私たちの忘れようという決意の費用を

この秋の終わりに、私たちの捧げ物を
誰が計算してくれるのだろうか、

受け取ってくださいるのはどなただろうか。

八

何を探し求めているのか、私たちの魂は、
ボロ船のデッキの上で

黄色い女、泣きわめく子どもが群がるところで
トビウオによつても

帆柱の先が指す星たちによつて
おのれを忘れられない魂は何を捜す？

蓄音機のきしる音にすり減らされ
ありもしない巡礼にしぶしぶ加えられ

さまざまな外国語から採ったきれぎれの思いを

つぶやきつつ——。

何を探し求めているのか、私たちの魂は、
潮水にひたされて朽ちた材木の上に乗つて
港から港へと旅を重ねながら、何を？

碎石はあちこちに位置を変え、松材のさわやかな香りも
日々おとろえて 吐く息に混じらなくなつてゆく、
この海の水に泳ぎながら、
かの海の水に泳ぎながら、
明かりもなく

人のいない海に、

私たちの国でもなく

あなたたちの国でもないこの故国の中で。

私たちは知っていた、この島々は美しかった、

私たちが指を上下しながらなぞっている、

このあたり、手に取れるばかりの距離の島々は。

古い港だ。私はもう待てぬ、

友を、松の木の島に向けて去った友を

また、スズカケの木の島に向けて去った友をも

あるいは、はるか彼方の外洋に向けて去った友をも。

私はさびた大砲を撫で、櫂を愛撫してみた、

私の身体が生命を取り戻すように、決断ができるように。

だが帆布はただ、かつての嵐がもたらした塩の匂いを放つばかり。

私が独りここに残ろうと思つたとしても、

私が求めたのは

孤独であつて、こんなふう待つことではなかった、

水平線にちらばっている私の魂のこなごなのかけら、

あれらの線、あれらの色、そしてこの沈黙では。

夜の星は私に思いださせる、オデュッセウスが

アスフォデルのお花畑で死者たちを待っていた時の

期待の心を。

私たちがここアスフォデルの花々の中に

もやい綱をかけた時、私は

かつてアドニスに傷つくのをみた緑濃い谷を

みつげられるかと思つたのだったが。

私たちの国はとざされた国、山はすべて

昼も夜も低い空を屋根にしている。

私たちには川もなく、井戸もなく、泉もなく、

わずかな貯水槽だけ、それも水がなく、

ただこだまするだけなのを崇めている私たち。

よどんだ、うつろな音よ、私たちの孤独と同じ音、

私たちの愛とも同じだ、私たちの身体とも。

ふしぎに思う、かつては私たちも

家を建てることのできたのを、

納屋も、羊小屋も作れたのを。

私たちの結婚も、私たちの花輪も、指輪も

私たちの魂には説明のつかぬ謎となりはてた。

どうやって私たちの子供たちは生まれたのか、

遅しく育ったのか？

私たちの国はとざされた国だ。

シュンプレガデスの二つの黒い岩が

私たちの国をとじこめている。日曜日に一息つこうと

港に下りてゆけば

私たちは見てしまう、夕陽に照らされた、

はてしない航海から戻ってきた船体のかずかずを、

どうやって愛するかを

忘れてしまった身体のいくつかを。

十一

ときとしてきみの血はこおる、月のように。

はてしない夜の中できみの血は

その白い羽をひろげる、

黒い岩のうえに、樹の形と家のうえに、

私たちの幼な時からのかすかな光とともに。

十二

海の中の瓶

三つの岩、わずかな焼けた松、独り立つ礼拝堂、

そして向こうにも

同じ風景の繰り返しが始まる。

三つの岩、門の形をした、さび色の岩、

わずかな焼けた松、黒と茶色に焼けて、

それから漆喰に塗りつぶされた四角な小屋。
さらに向こうには、何度ものくりかえし、
同じ風景がくりかえしつみかさなる、
水平線まで、すべてに君臨する大空まで。

イドラ島

ここに私たちはもやい綱をかけた、

折れた櫂をつなぐために、

水を飲み、眠るために。

私たちをさいなんだ海は深く、

深みを探られたことなくて

はてしない静けさをひろびろとひろげている。

私たちはここで小石の間にコインを一つみつけ

サイコロで持ち主を決めた。

いちばん若いのが取ってずらかった。

私たちは折れた櫂のまま、また出発した。

イルカ印の旗と大砲の音と。

かつてはきみの魂にかくも苛酷であつた海が

さまざまの色鮮やかな船を浮かべるようになった。

海は居並ぶ船を揺する、前後に、また上下に。

何もかも青、そこに白い帆の翼、

かつてはきみの魂にかくも苛酷だつた海が、

今や太陽の中で鮮やかな色いっぱいになった。

白い帆と光と濡れた櫂とが

ドラムのリズムでまろやかとなつた波を打つ。

このような信じられない奇蹟に出あつて

見つめればきみの眼は美しくなるだろうに、

きみの眼は遠くに届いてきらきらと輝くだろうに、

きみの唇はかつてのいのちを取り戻すだろうに。

これこそきみの求めていたもの。

え、きみは何を求めていたのか、灰を前にして、

あるいは風の中の霧の中の雨の中で

ともし火がその輝きを失い、市が沈んでゆき、

石だたみの上で

ナザレびとがきみに

おのれの心臓を開いてみせた時でさえも？

いったい何を捜し求めていたのか？

どうしてきみは来ない？ 何を求めていて？

十四

三羽の赤い鳩がいる、光の中に

私たちのさだめを記す、光の中に

ひとびとの色と身振りで

私たちが愛していたひとたちの。

十五

鈴懸の影のもっとも濃きはいずれぞ

眠りがきみをくるんだ、樹のように、緑の葉の中に。

きみは息をした、樹のように、静かな光の中で。

澄みきった泉の中に私はきみの姿をみつめた。

まぶたは閉じ、睫毛は水にくつきりと刻まれていた。

私の指を柔らかな草の中に置けば、きみの指に当たった。

私は一瞬きみの脈をとった。

そしてきみの心臓の痛みを身体の別の所で感じた。

鈴懸の樹の下、水辺近く、月桂樹の繁みの中で

眠りはきみを動かさず、きみをばらばらにして

私のまわりに、私のそばにまき散らした。

きみの総身にはふれられなかった。

きみはきみの沈黙と一体だった。

きみの影が大きく小さくなるのを見ていた、

他の影たちのなかに失せてなくなるのを――、

きみを放ちまた取り戻した、もう一つ別の世界の中で。

十九

生きるべく与えられた生命をわれわれは生きた。

重い鈴懸の下、黒い月桂樹の繁みの中に道を見失って

かくも忍耐づよく待つ人々を惜しむ。

また、独り井戸や貯水池に語りかけ

声の波紋に溺れる者を惜しむ。

われらの欠乏と汗とをわかちながら

われらの報酬を楽しむことを望まず

大理石の廃虚の彼方に向かうカラスのごとく

太陽の中に消える友を惜しむ。

われらに与えよ、眠りとは別の、心の平和を。

風が吹いてもわれらを涼しくせず、

糸杉の影はいつも幅せまく、

まわりのものは皆山々に向かつて駆けのぼる

あいつらはわれらの重荷だ、

死ぬすべを知らぬ友たちは。

二十一

この巡礼に出立した私たちが

欠け崩れた彫像をみて

われを忘れて口走った、生命はそう簡単に失せないと、

死はまだ踏み跡のない道を持ち

それなりの裁きを持っていると、

また私たちがおのれの足でまだまっすぐ立ったまま

死につつまあるのに、

葉ごもりの中に消えた。

きょうだい石となつて

硬さと無力さで一つに結びあわされたのに

古代の死者たちはこの環から逃れ 復活を遂げて

ふしぎな静けさの中で微笑んでいると言つた。

二十二

あまりにたくさんのものが

私たちの眼の前を通りすぎたので

眼はとうとう何一つものを見なかつた、

だが、ものたちの向こう側

ものたちの後ろ側では記憶はある夜、

柩の中の白いシーツのように

私たちにおかしな幻、

そうきみよりもおかしな幻を見せた。

幻影は通り過ぎてコショウの木の葉一つそよがない

すでに私たちのさだめをよく知つたうえで
砕かれた石のあいだを三千年いや六千年も

さまよつてみて

私たちの家庭になつていたかもしれぬ崩れ家の中を

捜し回つてみたが

日付を、そうして英雄的行動を

思い出そうとやつてみたが

さて私たちはできるようになるだろうか？――

すでに束ねられたり、散らばされたり、

実存しない困難と闘争して敗れたり、

盲目の連隊でいっぱいの道を見失い、また見つけたら、

泥の中に沈み、マラトンの湖の中に沈んだりしたが、

はたして私たちはできるようになるだろうか、

ただしく死ぬことが？

もう少し行けば見えるよ、
ハタンキヨウの花が咲き、
大理石が陽にかがやき、
海がくだけて波となるところが。

アスフォルデルの花の中で弱き魂だったわれらを。
彼らをして犠牲の頭をエレボスの方角に向け直させよ。

何ものをも持たなかつたわれらが

彼らに心の平和を教えるであろう。

もう少し行ったら

ちよつと背伸びしてみようね。

訳者ノート

ギリシヤ国文学翻訳賞を受賞された志田信男先生の『セフエリス詩集』にすでに訳があるのに、このような拙い訳を試みたのは、元来、私なりのセフエリス理解を志してのことであつた。残念ながら、かつて「プロピレア」に掲載したカヴァイス詩およびリッツオス詩についての論考ほどのものをもなし遂げられなかつた。

ここに海のわぎは終わる、愛のわぎが。
われらの果てるこのところいつか来て住む者は
記憶の中で血が黒く濁り、あふれる時に遭うであろう。
彼らにわれらを忘れさせるな、

「ミシストリマ」はよくT・S・エリオットの「荒地」と対比される。実際、セフエリスが一九三六年にエリオットを「発見」した二年後にこの詩群は出版されており、彼自身による「荒地」現代ギリシヤ語訳がその後を追っている。

もつとも、この親近性はかねて存在していて、その準備性の上に現実の出会いがあったと考えられる。もう一つはキリーが指摘するように、コラージュである「荒地」にはない一貫性、直接性、ギリシャの風土と文学的伝統への立脚がある。(Edmund Keeley: *Seferis and the "Mythical Method", in Modern Greek Poetry, Voice and Myth*, Princeton University Press, New Jersey, 1983)

「ミシストリマ」は俗語で「小説」だが、詩人は注して「ミュトス(神話)」と「ヒストリアー(物語)」との合成語として使っている。確かに、この詩には現代の神話とギリシャ神話とが相互浸透し、唐突に交替し、さらに目くらましをかけられて、全体として不透明 opaque な印象、キリーの表現では明暗(キアロスクロ)がある。

もとより西欧詩の伝統につながる詩でもある。一九三〇年代を代表する詩人たち、セフェリス、エリティスらによって現代ギリシャ詩は西欧詩との同時代性を獲得した。しかし、エリティス詩は颯爽と歩み、時には天上に達する。リッツオス詩は実際に映画文法によって作られ、映画の持つ多産性によつてあのように膨大な量がありえ、一見わかりにくい箇所も読者が肉眼を映画のカメラに置き換えれば平明でさえある。突然の静止、突然の移動、遠方と近景、二千年の過去と現在との唐突な入れ代わりも映画ではごく普通のことではないか。

彼の短篇編詩と長篇詩との使いわけも、短篇映画と長篇映画との相違と考えてみてはどうだろうか。これらに対して、セフェリス詩は積み重なり、凝縮し、歩むよりも停止し回帰し、イマージュも揺らぎ、定まらず、出没つねならず、また一つの鮮明度で一貫させるエリティス、リッツオスと対照的である。カヴァフィスの劇的なメリハリもない。対話があつても全体として独自のである。語る主体は特徴的に「私たち」(稀に「私」)であり、従つて、「きみ」が登場する時、場面には誤つて三人を想定してしまいそうになる。この一人称複数動詞の多用はこの詩群を「神話―物語―歴史 Ⅱ ミシストリマ」にならしめている基礎的な設定かと思われる。そして「歴史―神話」として、多くの詩は現実に始まつて過去と非現実に向かい、最後に幻想から投げ出されたかのように卑小な現実と悔恨とで終わるようみえる。

たしかに、この中には青年の憂鬱と自恃と幻滅と悲嘆と悔恨とがある。その背後には一九二〇年代のパリ留学時代の「宿命の女」ジャックリーヌとの腸を噛む苦い経験(個人的神話―歴史)と、故国ギリシャのトルコによる一九二二年八月の生地「スミルナの破局」から相互の「民族交換」に至る民族的悲惨(現代の神話―歴史)とが重畳している。その一〇年以後に書かれたこの詩群は一九三〇年の詩集「転回点」を引

き継いで、過去となつた青年期への訣別の位置にあるだろう。悲恋の歌「エロティコス・ロゴス」を一九三〇年に書いて一九六六年まで発表しなかつた彼である。青年期の個人的な傷の深さは思ひの他であるかもしれない。(Ioanna Tsatsou : My

Brother Seferis, a Nostos Book, Minneapolis, Minnesota, 1982 参照)

詩人は、カヴァフィス全詩集を一つの詩として読めといっている。まして、この詩群は一つの詩として理解するべきであらうが、それはまことに容易ではない。しかし、全体としての流れはある。

「一」は無駄な待機と旅、徒勞と帰郷であつて、最初の詩篇らしく全体を予感させる形でカヴァーしている。「二」は閉塞の極致で、これ以上は落ちぬと死力を尽くして踏み止まるが、「三」の傷つき、石となつた(おのれの)頭との直面はおのれの手が離れて(生きている)おのれの首をおのれが締める直前に至る。「四」はここで一転して、魂のアルゴ船の旅となる。しかし、この内面の旅であらうものは、誠実な仲間たちにもかかわらず、ついに故郷に帰らず、旅は忘れられる。ここでエルペノル―オデュッセウスの仲間で帰国を控えて酔つて屋根から転落する軽率な若者―がその遺言である「權の墓」によつて暗示される。愛すべき凡人でありつつ、時には大悪をなしうるこの若者は詩の狂言回しのように

その後も時々登場するが、詩人の分身か、現代ギリシヤ人の政治的風刺だろうか? 「五」はありえたかもしれぬ「現実」に生きる人(船乗り)たちとの出会いそこない、「六」で「きみ」が登場するが、彼女は古い、生気ある過去から遮断され、今後も疎外が続くだろうという。「七」は「きみ」と「私たち」との“二人ぼつち”。「六」「七」で閉塞的ながら「未来」が現われる。「八」は再び彷徨、摩耗、衰亡、過去の愛惜。「九」も苛立ちに始まり、当て外れで終わる。「十」は荒地の中へのほとんど完全な閉塞。「十一」に短詩が始めて現われる。短詩はこのシリーズにおいては転回点であつて、実際「十一」は「おさな時からの微光」で終わる。「十二」で再び荒地となるが、現実のギリシヤの風景であり、「私たち」はエルペノルを置いて再出発する。「十三」は一転して「海洋国ギリシヤの壮大な再生」となり、それをよそに「きみ」は何を捜していたのか? という責めとなる。神秘的な短詩「十四」で光の中に運命を記す三羽の赤い鳩は過去・現在・未来だろうか。「愛していた人々」の幻影が現われる。ここも転回点。「十五」はほとんど死である眠りだが、多くの友への憐憫を語りつつ、初めて安らかであり、眠りの他の静謐と平和を求める。

しかし、それは終わりではない。掲載できなかった「十六」

は血まみれの復讐、永劫回帰、「きみ」の喪失（スミルナの悲劇が底流しているか）、同じく「十七」は古代ギリシャの栄光にせめて子連れて行けといい、「十八」は絶望のあまり「私」は岩の中に沈む。短い「十九」は一転して「外界―自然」の無関心。これを第三の転回点として「二十」は禿鷹をみずから求めるプロメテウスであるおのれとなる。傷は自ら求めてのものであった。「二十一」で巡礼である私たちは初めて生命の頑強さ、古代の死者たちの私たちと違った静謐な微笑を含んだ復活を語る。「二十二」で「私たち」の経験はほんものでなかったのかという疑いと「ただしく死ねるか」という問いが初めて発せられる。最後の転回点の短詩「二十三」で裏表のない明るい世界の確実な予感が語られるが、それは現われず、全詩群を閉じる「二十四」は私たちの弱さと得るところのなさにもかかわらず、後に来る者たちに心の平和を教えるであろうという遙かな、しかし革新的な予感となる。エリオットの「荒地」がサンスクリット語で「平和」を三度唱えて終わるのと対照的である。

さらに、セフェリス全詩の中に、この詩群を置いて眺め直すべきであるが、それは私の現実の力を遙かに越えている。